

Title	日本キリスト教史における東北（東日本大震災国際神学シンポジウム）
Author(s)	山口，陽一
Citation	聖学院大学総合研究所紀要，-No.54, 2013.2 : 116-127
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4736
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日本キリスト教史における東北

山口陽一

1. はじめに

「これからの一〇〇年を見据える」ために一〇〇年を振り返りたい。年数としての一〇〇年ではなく、エポックとしての明治維新から一四五年、アジア太平洋戦争敗戦から六七年を考える。また、四〇〇年前の東北におけるキリシタンの歴史についても触れたいと思う。

「一体性」は日本と日本のキリスト教の特徴と見なされることが多い。しかし、小さな島国である日本も日本のキリスト教も地域的特徴を有している。キリシタン史⁽¹⁾における東北、明治以降の東北とキリスト教、特にハリストス正教会⁽²⁾、そして戦後日本における東北について考察し、東日本大震災が日本キリスト教史において持つ意味を考える。

2. キリシタン史（一五四九〜一八六三年）における東北

東北における本格的なキリシタン宣教は一六一一年、伊達政宗がソテロー (J. C. Sotelo)⁽⁴⁾ を仙台に招いたことに始まる。伊達政宗は、すでに徳川幕府の迫害が始まっていた一六一三年、支倉常長を貿易交渉の使節としてイスパニアに派遣する。一六一四年一月（慶長一八年二月）徳川幕府の「伴天連追放文」⁽⁵⁾ が発せられ京阪で迫害が始まる。同年四月、畿内のキリシタン七一人（京四七、大阪二四）⁽⁶⁾ が津軽に追放された。こうした追放者あるいは避難した信徒たちが東北各地で布教し、ここに東北キリシタン史が展開する。東北には「キリシタンの世紀」と称せられるような華やかな南蛮文化の流行も南蛮貿易の利益もない。迫害により散らされた信徒たちと、生命をかけて牧会を続ける神父たちの苦難の歴史のみがある。

一六一三〜一六二〇年、支倉常長が派遣されていた時期が、仙台を中心とする東北布教の最盛期となる。支倉は洗礼を受け、教皇パウルス (Paulus) 五世にも謁見するが、目的は果たせず一六二〇年に帰国し、二年後に亡くなる⁽⁷⁾。そして、この年から仙台藩でも迫害が始まる。支倉の家臣、後藤寿庵⁽⁸⁾は、水沢に堰を築いて治水し、東北布教の中心となった。この水沢を拠点にして津軽、秋田、南部、最上、米沢など東北各地への宣教が進められた。

一六二三年、江戸の大殉教⁽⁹⁾の後に、仙台藩では後藤寿庵を追放し、カルヴァリヨ (V. Carvalho) が捕縛される。この時期に迫害を逃れたキリシタンが南部（盛岡）に潜入した。南部では一六三五年から翌年にかけて約一四〇人が処刑された。一六二四年には仙台でカルヴァリヨらが殉教、以後、寛永期の東北各藩の殉教者数は、久保田（秋田）一四〇、弘前八八、仙台三六三、南部一四六、米沢八六、庄内二五、白石七、山形三八、白河一六、会津五七、二本松一四、

新庄一〇、計九九〇人を数える。⁽¹⁰⁾ 一六三九年、日本人神父岐部ペトロは、水沢で捕縛され江戸で殉教した。

この世の幸いより天国の幸いを希求した神の民の信仰、神の国の喜びに生きた信徒たちの忍耐と希望が東北キリシタン史の特徴である。その布教は生命をかけた証しであり、良き業の遂行であった。水沢の寿庵堰は、今も岩手随一と言われる水田地帯を支えている。

この歴史は世界と日本のキリスト教にとって貴重な遺産であるが、とりわけ東北のキリスト教会にとって励ましではないだろうか。

3. 日本の近代と東北のキリスト教

幕末の修好通商条約による開港地のない東北への宣教は、横浜・築地から、あるいは函館から開始された。東北のキリスト教を特徴づけるのは、函館からのハリストス正教会による伝教である。⁽¹²⁾ 函館にロシア領事館が置かれたのは一八五八年、翌年には聖堂が建てられ、一八六一年にはニコライ (Nikolai)⁽¹³⁾ が着任した。当時の函館は、いわば北の長崎であり、蝦夷地警備のための津軽・南部両藩からの兵、その他有為の人々が集まっていた。ニコライは、日本語はもとより、国史、儒教、神道、仏教、風俗習慣までを学び、国漢の読書ができるようになった。これは日本人士族の英学修業に応えて米英の学術を教えたプロテスタント宣教師にはない特徴であった。⁽¹⁴⁾ 一八六八年四月二四日(慶応四年四月二日)、沢辺琢磨⁽¹⁵⁾ら三人が正教会最初の洗礼を受けた。

一八七二年、ニコライは東京に移動し、函館と東京を結ぶ伝教が始まる。二月一三日、仙台で迫害が起こり、沢辺琢磨は捕えられ入獄、処分を受けた者は一四〇余名に及んだ。ちょうど横浜に日本人による最初のプロテスタント教会が

成立した年である。カトリックはそれ以前から浦上四番崩れ等の迫害を受けていた。プロテスタントに迫害がなかったとは言わないが、文明開化の担い手によるプロテスタントは比較的守られていた。

伝教は、白河、郡山、福島、仙台、古川、一ノ関、水沢、花巻、盛岡、八戸、青森をつなぎ、沿岸部の石巻、気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、大槌、山田、宮古へと延びる。今回の津波被災地はハリストス正教会の古くからの伝教地である。

一八七九年にハリストス正教会信徒は四〇〇〇人となり、一八八九年には一万六〇〇〇人となる。この間、宣教師はわずか三人である。一方、プロテスタントは一八八三年からのリバイバルにより八〇〇〇〇人だった信徒が一八九〇年には三万四〇〇〇人となる。ニコライは、欧化主義を背景に教勢の拡大をするプロテスタントに憤懣を隠さない。

「いま日本が正教に改宗する可能性はわずかしかない。日本にはプロテスタントとカトリックの宣教師がありあまるほどいる。五〇〇人近くもいる。それに日本はありとあらゆる分野で、プロテスタントとカトリックの国々の文明に魅了されてしまっている。(中略)いま、日本は、国家としての活動を盛んにするためのいわば資源として、外国の信仰を求めている。信仰でもそうなのだ。同じ目的のためには、ありとあらゆる現世の取引に適している非正教の教えのほう¹⁶⁾が、実際により役立つのだ。そこに正教の居場所はない」。

プロテスタントも文明にとどまらず、宗教そして福音を語り、農村にも伝道した。一九世紀後半までは地縁血縁をたどり農村にも意欲的な伝道がなされた。しかし、二〇世紀に入り、プロテスタントが都市型の伝道と教会形成に移行して定着したのに対し、ハリストス正教会は停滞する。日本人の期待は、ロシアが敵国となったことも重なって、前近代の信仰を継承するハリストス正教から離れていった。ハリストス正教を日本の農村の「常民」(Folks)に定着させようとするニコライの情熱は結実せず、近代日本の「良民」(Citizen)に受容されたプロテスタントが優位となる。今、改めて東北のキリスト教に注目するならば、ハリストス正教の再考は興味深い。

一八六八年に新政府を設立した薩摩藩、長州藩を中核とする新政府軍と、旧幕府勢力および奥羽越列藩同盟が戦ったのが戊辰戦争¹⁷である。明治のプロテスタントは、この敗者の側にいる。幕臣の植村正久¹⁸、津軽藩の本多庸一¹⁹、会津藩の井深梶之助、松山藩の押川方義等、政治的な立身出世を望めない若者が精神の維新を企てたのが明治のプロテスタントであると評したのは、同時代のジャーナリスト山路愛山²⁰である。

本多庸一は津軽藩命で横浜に学び、弘前教会を設立、青森県の自由民権運動を牽引した。盛岡の鈴木舍定は築地で入信、『盛岡新誌』を発行して自由党結党に貢献した。

仙台の自由民権結社である進取社は、ハリストス正教の信徒が中心となって設立したもので、佐沼など信徒の多い東北に支部が作られた。進取社は、「地方ノ権力ヲ培養シテ西南人ノ下流ニ居ラス、独立不羈能ク自治ノ精神ヲ揮揮」²¹することを目指して、民権運動を展開している。宮城県下には八〇、福島には六二、岩手には三五の自由民権結社が成立する。

東北のキリスト教は奥羽越列藩同盟以来の反骨精神をもって自由民権運動に関わったが、自由民権運動を抑え込んだ明治政府は、大日本帝国憲法（一八八九年）と教育勅語（一八九〇年）によって天皇主権の国家体制を確立する。その後、「教育と宗教の衝突」論争期に教勢の伸びは止まり、地方における伝道は反キリスト教の逆風により苦境に陥る。日本が日清、日露戦争を経て富国強兵、脱亜入欧、和魂洋才の近代化に邁進する中、東北の農村教会は停滞する。二十世紀大挙伝道の頃より伝道は都市型となり、大正デモクラシー期のプロテスタントの成長は、大都市、地方都市において著しい。天皇制国家に同調する教会は、近代日本と軌を一にして上昇をめざし、やがて大東亜戦争遂行のために日本基督教団に合同することになる。

4. 戦後日本と東北のキリスト教

戦後、一九四八年の東北のキリスト教会数は、プロテスタント一五二、カトリック二八、ハリストス正教会五〇であり、プロテスタントとカトリックが全国比一〇％以内であるのに対し、ハリストス正教会は三五％と突出している。これが二〇一〇年の統計では、プロテスタント五四八、カトリック六四、ハリストス正教会二三となる。⁽²²⁾ ハリストス正教会は減っているが全国比はあまり変わらない。プロテスタントでは日本基督教団が一・三倍となったのに対し、それ以外は一八・六五倍となる。戦後の新たな教会の中では、保守バプテスト同盟五六、ルーテル同胞教団二一などが特徴的である。⁽²⁴⁾ 戦前からの教会の粘り強い伝道をもってしても、地域に根ざし、神の国をもたらす宣教は、緒に就いたばかりである。

岩手県大船渡市の山浦医院の院長、カトリック大船渡教会の山浦玄嗣は、ふるさとの仲間が自然に理解できることばで聖書を翻訳しようと考え、二五年かけて気仙地方の方言を研究し、表記を確立して辞書を作り、『ケセン語訳聖書四福音書』を完成させた。このような地道さを、私たちは学ばなければならない。

戦後の東北は、敗戦により朝鮮、満州、台湾を失った日本において戦後復興を支える食料供給地となり、高度成長を支える労働力を首都圏に供給した。その意味で東北は日本の「植民地」だったと、「東北学」を提唱した民俗学者の赤坂憲雄は言う。赤坂氏は現在、福島県立博物館館長で東日本大震災復興構想会議の委員である。

「最初に僕のなかに浮かんだのは『なんだ、東北って植民地だったのか、まだ植民地だったんだ』ということでした。かつて東北は、東京にコメと兵隊と女郎をさしだし、そしていまは、東京に食料と部品と電力を貢物としてさしだし、

迷惑施設を補助金とひきかえに引き受けている。そういう土地だったのだと」⁽²⁵⁾。

日本における都市と地方の格差を「植民地」と表現するのは注意を要する。旧植民地の人々からすれば「植民地」の悲惨はそんなものではないと憤られるであろう。しかし、東北には確かに「植民地」的性格があり、原発事故はこれを露わにした。

私の義理の父は秋田の出稼ぎ労働者であり、妻は幼い頃、父と多くの時を過ごせなかったと言う。そうしたことを考えれば、東北の各地では原子力発電関連施設の誘致により出稼ぎが不要になった。ところが原発事故により、その土地から村ごと避難を強いられることになってしまった。福島第一原発「運命の日」と言われる三月一五日、二号機の格納容器が爆発しなかったのは「偶然」だったと言われる。この日に散らされた放射能との戦いは、いつまで続くかもわからない。

高橋哲哉は、原発を「犠牲のシステム」と呼び、そこからの脱却を語るが、次に引用する言葉からもわかるように簡単な課題ではない。曰く、「いかなる犠牲もない国家社会が成り立つかどうか、これはここでは答えることができない問題である。しかし、それでも、軍事基地や原発のリスクを限りなくゼロに近づけていく、そういう政治的な選択は十分可能だし、それをめざしていく必要があると私は思う」⁽²⁶⁾。

宗教学者として発言を続ける山折哲雄は、核抑止力を意識した戦後日本の核の平和利用は、冷戦終結後再定義の必要に迫られた。そこで問題になるのが「欲望」問題であるとして以下のように言う。「今、その再定義で問題になるのは、豊かさへの、利便性へのわれわれの『欲望』の問題ではないか。果てしない豊かさへの欲望を保証する電力。それを生む原子力発電に、賛成する、反対する、そのいずれの場合においても、今回の危機的な状況を機に、われわれの欲望の問題をどう考えるか。ここに行かないと根本的な議論にはなっていないような気がします」⁽²⁷⁾。

原子力発電という制御できない技術を進めるのが「欲望」であるとするなら、「ここまででは来てもよい。しかし、こ

れ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」(ヨブ三八章一二節、新改訳)というところを知らなければならぬのではないか。都市と地方の格差、犠牲のシステム、欲望の問題、こうした問いに日本のキリスト教はどう応答すべきであろうか。

5. 東日本大震災とこれからの一〇〇年

二〇〇四年のスマトラ沖地震の津波では二二万人、二〇〇八年の四川省大地震では九万人、二〇一〇年のハイチ地震でも津波により三十一万人以上が死亡した。こうした自然災害はこれまでも起きたし、これからも起こるであろう。一八九六年に二万二〇〇〇人の死者を出した三陸大津波、一九二三年に一〇万五〇〇〇人の死者を出した関東大震災に匹敵する記憶として、東日本大震災は一〇〇年後の歴史に残るであろう。いや、原発事故のゆえに、今後一〇〇年の世界を左右すると言っても過言ではない。この地震列島に五四基の原子力発電所を置くことは、世界の将来にも関わることなのである。これからの一〇〇年を見据えて、三つのことを述べて終わりたい。

第一は原発のことである。三二〇万人の日本人が犠牲となり、アジアにおいて二〇〇〇万人の犠牲者を出したアジア・太平洋戦争の猛省が「憲法九条」を生んだように、東日本大震災を契機として、廃棄物の最終処分もできない原発への過信を脱し、自然エネルギーへの大転換が図られるなら、二〇一一年三月一日は世界史に残る日となるだろう。一七五五年のリスボン大地震は、天罰から自然災害へ、啓蒙主義的な災害理解の契機となった。原発の「安全神話」が終わった今回の事故において、更なる最悪の事態が避けられたのは、神の守りであった。科学技術への過信を改め、「欲望」を抑制し、新しい生き方を始める時が来ている。この世界が経済成長なしにあり得ないなら、ここまで原発に

依存した経済を今後は脱原発に依存する経済に換えるべきであろう。教会は経済成長なしの「幸福」を証しするべきであろう。

第二に、関東大震災は国民精神の作興を進める契機となり、続く戦争の時代を準備したと言われる⁽²⁸⁾。鈴木範久は言う。「関東大震災を契機に国家による国民教化の方向が強くなり打ち出され、それに対して日本のキリスト教界が、組織を強化して協力姿勢をとっていることです」。東日本大震災からの復興のあり方は、今後の日本の民主主義とも関わることである。原発事故における情報隠し、日の丸・君が代強制条例を看過してはいけなしいし、原発避難者や原発労働者を「犠牲」としてはいけなしい。

第三に、東北の教会との連帯である。グローバル化する世界における人口の都市集中は、日本においても顕著である⁽²⁹⁾。現在、大都市にグローバルな世界を背景とする活発な教会が生まれる一方で、地方の教会との格差は広がりつつある。そんな中で、東北の被災地の教会が地域に根ざして教会を形成することは、大きな希望であり、明治以来の宣教のあり方に対する問い直しでもある。日本の近代化と共に上昇志向で歩んだ日本のキリスト教がなし得なかった歴史的な課題への挑戦であるとも言えよう。この一年、被災地支援で証された教会の世界的ネットワーク、教派を越えた協力と、行政による支援の及ばない人々への教会らしい支援の輪の広がりには注目に値する。震災の痛みと復興に向けての労苦を地域の人々と共にする教会は、神の国のリアリティーをもって日本宣教を進めていると言える。また、そこに協力させていたただく日本の教会は、自らが遣わされた地域に向き合う姿勢を新たにし、支援以上に励ましを受けている。

「これからの一〇〇〇年を見据える」ために一〇〇〇年、四〇〇〇年を振り返ったこの講演を締め括るにあたり、四〇〇〇年前の殉教者たちの忍耐と信仰を誇りとし、農漁村のごく普通の日本人にキリスト教の信仰を根付かせようとしたニコライのように、山浦玄嗣のように、地域に根ざし遠くを見据えて歩みたいものである。将来に禍根を残す技術ではなく、水沢の寿庵堰のような未来に豊饒をもたらす技術への転換を図りたい。その昔、宮沢賢治は、心象世界における理想郷

を岩手に重ね、遠くイーハートープを夢見た。私たちは、みこころが成るところの天の都を目当てとして東北再生をめざしたい。この一年、主は東北の教会の叫びを聞かれ、御業を為してくださいました。そうした東北の諸教会と共に歩むことは、日本の教会の再生にもつながることであろう。

注

*この注は英語版読者を意識して付されています。

- (1) キリシタン (Christao) は、一六世紀から明治期初頭までの日本におけるカトリックを表す術語。
- (2) ハリストス (Christos) 正教は、ロシアからもたらされたオーソドックス教会。
- (3) 伊達政宗、仙台(伊達)藩主、一五六七〜一六三七年。
- (4) L. C. Sotelo, フランシスコ会 (Ordo Fratrum Minorum) 士、一六〇三年来日、一六二四年大村で殉教。
- (5) 支倉常長、伊達政宗家臣、一五七二〜一六二二年。
- (6) 松田毅一監訳「一六一四年度日本年報」『十六・七世紀日本年報』第II期第二巻、同朋舎出版、七八頁。
- (7) 五野井隆史『人物叢書支倉常長』吉川弘文館、二〇〇三年。
- (8) 後藤寿庵、支倉の推挙で伊達政宗家臣となった。五島で受洗、洗礼名ジュアン、生没年不詳。
- (9) 一六二三年二月四日、品川で原主水、G. Angelisら五〇人が火刑にされ、弾圧激化の契機となった。
- (10) H. Cieslik 監修、太田淑子編『日本史小百科キリシタン』東京堂書店、一九九九年。一六一四年から一六三九年までの殉教者は、教会の把握で宣教師一三四名、信徒一九一〇名。J. Laves は、刑死三一七一、獄死八七四の計四〇四五名、

H. Cieslik は、推定四〜五万人としている。一八六七年にカトリック教会は二〇五名を聖人とし、その後一六名を追加
二〇〇八年には一八八人の殉教者が列福された。

(11) 岐部ペトロ、イエズス会士、一五八七〜一六三九年。岐部ノ処刑にあたり宗門改役の井上筑後守政重は記した。「キベヘイ
トロは軀び申さず候ツルシ殺され候同宿ども勸め候ゆえキベを殺し申し候由」。

(12) カトリックは布教、プロテスタントは伝道、正教会は伝教と言う。それぞれのニュアンスが面白い。

(13) Nikolai, 本名 Ioan Demitrovich Kasalkin, 一八三六〜一九二二年。一九〇六年日本大主教。

(14) 中村健之介監訳『宣教師ニコライの全日記』（全九巻、教文館、二〇〇七年）は、一八七〇年から一九一一年までの日記で、
東北伝教の記録も多い。

(15) 沢辺琢磨、ハリストス正教会最初の日本人司祭、土佐出身で坂本竜馬の従弟、一八三五〜一九一三年。

(16) 中村健之介編訳『ニコライの日記（上）』（岩波文庫、二〇一一年、二九五〜二九七頁（二八八六年一月三〇日））。

「本当のキリスト教は、へりくだりの心をもって、真に霊的な永遠の目的のために採り入れられなければならないものだ。
『へりくだり』『霊的目的』『永遠の救い』、これらのことは日本をつかさどる人びとの頭にはまったく入っていない。（中略）
そんな者たちに正教がわかるだろうか。だから、日本に正教が導入されることにならないからといって、腹を立てたり、
興奮したり、くやしがりたりすることはないのだ。祈ることだ。いつもと変わらない自分の祈りを捧げることだ。そして、
たゆまず働くことだ」（同上、二八四〜二八五頁。一八八五年一月二三日）。

(17) 会津藩、庄内藩とこれに協力する奥羽越列藩同盟三藩は新政府軍に切り崩され、会津戦争（一八六八年六月一〇日〜二一
月六日）、函館戦争（一八六八年二月四日〜一八六九年六月二七日）において新政府軍に敗れた。

(18) 植村正久、一八五八〜一九二五年、日本プロテスタントの中心、日本基督教会（長老教会）の中心的指導者。

(19) 本多庸一、一八四八〜一九二二年。庄内藩と戦った同志、菊池九郎も信徒となり国会議員、弘前市長。

(20) 山路愛山『基督教評論』一九〇六年。岩波文庫版（一九六六年）二五頁。井深梶之助は戊辰戦争後、横浜遊学を命じられ、
のち明治学院を設立する。押川方義は日本基督一致教会の宮城中会と東北学院を設立する。

(21) 国立歴史民俗博物館「ハリストス正教会・自由民権・開化万華鏡」（展示史料）。

(22) 戦時下に合同した日本基督教団の教会と伝道所は、一九四八年の統計によると青森九、岩手一四、宮城三三、秋田一〇、

山形一八、福島三一、計一一五（全国比九・一％）、聖公会一六（七・二％）、その他二〇（六％）、プロテスタント計一五一、カトリック二八（九・二％）、ハリストス正教五〇（三四・五％）であった（『キリスト教年鑑』キリスト新聞社、一九四八年。統計は一九四八年五月一〇日現在）。

(23) 日本基督教団の教会数は、青森二二（その他五四）、岩手二〇（三五）、宮城三三（二〇）、秋田一七（三五）、山形一六（五二）、福島四一（九七）、計一四八（全国比八・七％）、その他のプロテスタント三七三（六・三％）。聖公会二七（九％）、カトリック六四（七九％）、ハリストス正教会二三（三二四％）。プロテスタントは教会インフレーションサーピスの二〇一〇年統計、カトリックと正教会は『キリスト教年鑑』二〇一一年による。

(24) 日本基督教団以外で多いのは、保守バプテスト同盟五六（山形二〇、宮城一六、福島一〇）、ルーテル同胞教団二二（秋田一一）、バプテスト連盟一八、日本キリスト改革派教会一五、日本同盟基督教団一四などであり、単立教会は三二である。青森の福音キリスト教会連合九、福島の日本イエス・キリスト教団九なども特徴的である。

(25) 赤坂憲雄・小熊英二・山内明美『東北』再生』イースト・プレス、二〇一一年七月十五日、一五頁。

(26) 高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』集英社新書、二〇一二年一月二二日、二一六頁。高橋は『国家と犠牲』（NHKブックス、二〇〇五年）以来、本書においてもキリスト教思想における「犠牲」の問題を批判的に取り上げている。プロテスタントの立場から言えば、唯一の犠牲としてキリストを捉えることで、他の犠牲に依拠する誘惑を退けるべきであろう。

(27) 山折哲雄・赤坂憲雄『反欲望の時代へ大震災の惨禍を越えて』東海大学出版会、二〇一一年九月一日、四六頁。

(28) 鈴木範久『関東大震災と日本のキリスト教と内村鑑三』『福音と世界』新教出版社、二〇一一年一月号。

(29) 世界の都市人口の比率は、一九〇〇年一三％、一九五〇年二九％、二〇〇五年四九％。日本では、一九四五年二八％、一九七〇年七二％。小熊英二、前掲『東北』再生』、五〇〜五一頁。